

【静岡】女性医師支援枠を設定「キャリアを諦めない働き方ができる」-谷口千津子・浜松医科大学医師トータルサポートセンター特任講師に聞く◆Vol.2

医師一人一人に合ったオーダーメイドな就労支援が特徴

2025年10月22日（水）配信 m3.com地域版

2025年7月に県から「男女共同参画社会づくりに関する知事褒章」を受賞した浜松医科大学（浜松市）医師トータルサポートセンターの谷口千津子特任講師は、全国的にも珍しい女性医師への就労支援活動を行ってきた。女性医師が柔軟に働きやすいよう新たな採用枠の設置を大学に提案し、県全域で支援を推進しようと県内の病院を訪問して連携体制を構築。「一人一人に合ったオーダーメイドな調整が特徴」と話す谷口氏に、活動の詳細を聞いた。（2025年8月27日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



谷口千津子氏（本人提供）

医師と医局の間に入り、本人が言いづらいことも伝えられる

——医師トータルサポートセンターは2017年、子育て中の女性医師などが柔軟に働けるよう、新たな採用枠である「女性医師支援枠」を設けました。

これは、岡山大学病院が行っている「MUSCATプロジェクト」を参考にしました。先ほど紹介した「ふじのくに女性医師支援センター」で県全域にわたって女性医師を支援していく際、どう進めていけば良いかと全国の事例を調べました。その中で、同院が先進的な制度を設けていることを知り、「本学でも取り入れたい」と当時のセンター長に提案して了承を得ました。

通常、大学病院に勤務する場合、自身が所属する医局のルールに従うことになりますが、出産後その全てに応えられずキャリア形成を諦めてしまうケースがあります。そんな人の受け皿になりたい思いで開設したのが、女性医師支援枠です。この枠を利用する医師は医局ではなく医師トータルサポートセンターの所属になる一方、仕事は自身の専門科で行うことが可能です。ポイントは、センターが医師と医局の間に入っていることです。事前に医師と面談して本人の状況や希望、将来展望などをヒアリングして所属講座の医局長などの上司にセンターから働き方の相談をしていきます。医師本人にとっては医局に言いにくい希望を伝えられ、医局にとってもプラスの人材確保ができることが利点になると思います。

——女性医師が働きやすいよう、勤務時間などを調整していくわけですね。

そうです。要は、妊娠や出産などに伴う離職を防ぎ、長期的に働きやすくするための調整役ですね。常勤での勤務が難しい女性医師をセンターが医員または非常勤として雇用しています。「医員」は給料的には非常勤と同じ扱いですが、週に31時間以上仕事をしている専攻医などは常勤と同様、研修期間に含まれます。支援枠を利用したい場合、一つの例としてまずは非常勤で入って後に医員に移行し、やがて常勤として勤務が可能になればセンターを卒業して医局員になる、といった流れをたどることができます。外の病院に常勤で出る場合も「頑張ってるね」と送り出しています。今は4人の女性医師が支援枠で働いており、過去、多い時には7人が利用していました。

各病院に担当医を配置、センターを拠点に連携を図る

——県から委託されて運営している「ふじのくに女性医師支援センター」では、より広く静岡県で働く女性医師を支援しようと県内の病院と連携しています。

医師トータルサポートセンターとふじのくに女性医師支援センターのどちらも学内に設けられており、医師トータルサポートセンターはセンター長や副センター長をはじめ8人ほどが在籍しています。一方、ふじのくに女性医師支援センターは私と専従事務員の2人が事業を任されています。

ふじのくに女性医師支援センターの活動では、県内の病院を一つ一つ訪問して管理者や病院長に事業内容を説明して回りました。1974年に開設した浜松医大は新設医大の一つであり、県内の病院には以前から東大や京大、慶應大、自治医大といった県外の大学から医師が派遣されています。本学と関係が深くはない病院がたくさんあるため、まずは管理者や病院長と顔を合わせて信頼関係を築き、さらに、院内に私たちとの連携の窓口となる医師を担当者として配置していただきました。担当者を事務職員だけでなく医師にもお願いしたのは、「本音」のやり取りをするためです。夫などの転勤に伴って静岡で働きたい女性医師や女性医師の雇用を検討している病院のリアルな情報や考えを橋渡ししたいと考えています。入職を検討している医師にとっても、実際にその病院で働いている人に話を聞いた方が良いでしょう。

——医師トータルサポートセンターとふじのくに女性医師支援センターのいずれも、人や組織のマッチング機能を果たしているわけですね。

相談者からじっくりと話を聞いてニーズを把握し、その人に合うであろう病院を紹介するオーダーメイド的な活動が特徴です。「こんな勉強ができる病院に就職したい」と相談があれば、連携先の病院に「こういう希望のある先生がいますがどうですか」と伝えてマッチングを図っていきます。逆に、病院の診療科の科長などから「今まで女性の先生が少なかったからどう対応していいかわからない」といったご相談があれば医師トータルサポートセンターでの取り組みと同じように私が間に入って両者にヒアリングを行い、調整を試みます。

復帰後の働き方で悩ましいのが、上司や同僚の医師が必要以上に配慮してしまうことです。子育て中の女性医師からすると配慮していただけるのはとてもありがたいのですが、診療や技術的な修練などにおいて「この勉強は続けたい」といったように意欲がある方もいます。そうした気持ちを把握しないまま「子育ては大変だから」と過剰にサポートしてしまうと、かえって本人が望んでいる取り組みができず、モチベーションの低下につながることもあります。そんな状況が起こり得ることも踏まえて、個別に具体的な状況や希望をうまく吸い上げ、医師と病院にとってウィンウィンになるよう調整していくことが私たちの仕事です。



女性医師の相談に乗る谷口氏（大学提供）

——女性医師支援枠の運営や県全域にわたるサポートを行っている大学は全国でも少ないのではないのでしょうか。

そうですね。先に挙げた岡山大学など国立大で支援枠のような制度を行っているところはあると聞きますが、私立大では推進していくのが難しいようで全国的にも少ないと思います。また、ふじのくに女性医師支援センターのように県レベルで連携して医局や大学、病院を問わずオーダーメイドで支えていく活動はより珍しいのではないのでしょうか。

◆谷口 千津子（やぐち・ちづこ）氏

1993年浜松医科大学卒。同大での研修後、旧国立東静岡病院（現国立病院機構静岡医療センター）や旧共立湖西総合病院（現市立湖西病院）などに勤務。2017年から同大で女性医師の就労支援に取り組む。現在、浜松医科大学医師トータルサポートセンター特任講師、ふじのくに女性医師支援センターコーディネーター。日本産科婦人科学会専門医・指導医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

